

苦をば苦ととり、楽をば楽とひらく

新 間 智 孝

平成七年一月一七日。私は当時三二歳でした。地震発生時刻の午前五時四六分、私は朝の水行を終えてストーブの前で身体を温めていた時でした。突然の大きな揺れに、地震だと言うことは冷静に判断出来ず、「死ぬ」という恐怖と「子供を護らなければならない」という意識が働いた事だけは、はっきりと覚えています。ストーブは自動的に消化され、家の中はメチャメチャになりましたが、私が住んでいた庫裡は二階建てだったので、幸い倒壊は免れました。

また当時二歳半と0歳児の子供もケガもなく無事でした。別棟に居ました師匠の無事も確認しました。震災の七年前に出来たコンクリート造りのお寺は新建築基準法に則っていましたが、本堂や新しい客殿・事務所棟は無事に残りましたが、それ以外のお寺の建物は全壊致しました。そんな状況下で私が考えたことをお話しします。

まずは人間として何をすべきかという問題です。

自分や家族が震災から助かったとき、どこまで家族のそばにいてやり、どのタイミングで僧侶として自分は動き出すのか。当時子供も小さかったし、ライフラインもストップし、女房も不安なので「側にいて欲しい」と言います。突然襲ってくる災害は、私たちのように家族全員無事とは限りません。怪我人や死者が出ている事もあり得ます。

災害からは無事に逃れられても元々病気の者がいる。高齢者がいる等、被災者のおかれる状況は千差万別です。

まずは自分達の身の安全が最優先だとは思いますが、後から色々な体験談を見聞きすると、家族を顧みずに働いた医者や消防士、警察官、役所の人も沢山いました。

次に悩んだのはお寺という場所のあり方です。

お寺という場所は、遺体安置所として受け入れ、死者の供養を中心にするのが本分ではないか。そうではなく避難所として生存者のケアを受け入れる方が先決ではないか。

寄付をいただいで建てたお寺だから、檀家を優先して受け入れるべきではないか。しかし地域に根付く公益法人なのだから、近隣の人や助けを求めて来た人を断れないのではないか。そんな風に悩みました。

近隣の日蓮宗寺院も沢山被災しており全壊の寺もあります。

だからまずは、ケガもなく無事だった私は日蓮宗教師。

そうしたら当然優先課題は、近隣のお寺の復興に協力すべきだろう。お寺が復興しなければ檀家の拠り所も無くなり、宗門全体の大きな損失になるではないか。

しかし個々の檀信徒がいてこそ機能するのがお寺。そうすると何よりも先に檀信徒の復興や生活の安定に目を向けなければ、僧侶として失格ではないのか。

たくさんの救援物資を頂きました……

ここでも先ほどと同じ事で悩みます。沢山頂いた救援物資を檀家に配るべきか、近所に配るべきか。誰にどう配布すれば平等になるのか悩みました。また「お檀家に配って上げて下さい」と頂いた場合もあります。しかし配りに行

きたくても、近所に檀家さんは固まって住んでいるわけでもありません。道路も寸断され、車や單車も自由に動かせない中で、被災者自身が救援物資を配布するのは困難でした。また生の食料品を頂いても電気が不通で冷蔵庫も使えません。寒い時期だったから、まだ日持ちしましたが、救援物資も、ただただ届ければ良いってものじゃない事に気づかされました。

安否確認にも困りました。

当時は、携帯もまだそんなに普及していませんでした。お寺の電話回線が、復旧すると電話は鳴り止みません。ほとんどが全国の知り合いの教師や友達・檀家からですが、内容は「大丈夫でしたか？何か必要な物があれば言ってください。救援物資を届けたいのですが、電車は何処まで行けますか？」連日マスコミでは死亡者が確認出来たら、その名前を全国に報道していたはずですが、電車の復旧状況もそうでしょう。正直私は「そんなことをイチイチ電話で聞いてくるな」と思いました。電話して来てくれる相手は、こちらのことを心配してくださっている気持ちは重々判ります。しかし一通り説明して電話を切ったら、またラインとなります。同じ事をオウム返しで繰り返す日々が続きます。普段は直接電話に出ない師匠が、その役をかってくれましたので私は動けましたが、誰かがひとり、電話の前に張り付かなければならない状況でした。檀家さんの家族で亡くなった方がいて、お寺に電話してもいつも話し中という状態が起きました。

一般的な話ですが、何週間か経って被災者が落ち着いても救援物資を毎日もらったりしていると……

今度は貰うのが当たり前になってきます。慣れてくると贅沢にもなります。私たちは被災者なのだから「してもらうのが当たり前」という感覚です。そのようになってきた被災者を今度はどうやって自立させていくかも難しい課題

です。

ボランティアの活躍と自分との比較

私のお寺は交通の便の良い所に建っており、当時の師匠の考えもあつて有志の日蓮宗教師の方々や全日青がボランティアに来て下さり、当山はその拠点になりました。ウチで炊き出しを作つて、避難所に入れず公園でテント生活している被災者の手助けをしておられました。ボランティアに来られている教師の方々の中には、器用な方がおられて、料理が得意だったり、大工仕事が出来たり、壊れた水道管を立ち上げて水が出るようにしたり、随分と助けられました。その反面、不器用な私は何もお手伝い出来なくて、かといって体力もそんなに無いので、ガレキの後片付けといつてもたいした事は出来ません。ボランティアの方が頑張っているのを傍らで見ながら、さてじゃあ私は何をすべきなのか、悩んで落ち込んだ時期もありました。

そんな時、檀家さんから訃報の知らせが入つて遺体安置所に行つたんです。それはそれは重苦しい空気の中でした。おびただしい数の遺体が安置されている中で、お檀家さんの亡骸を見つけてお経を上げました。すると他の遺族の方からも「お経を上げて欲しい」と頼まれたんです。「私は日蓮宗ですが、構いませんか？」と聞いたたら「何宗でも良いから、お経を上げて下さい」と泣きながら言われました。この事がキッカケとなり、私は「今自分に出来る事はこれだ！」と遅まきながら実感して、それから毎日数カ所の遺体安置所を巡つては、読経法味を捧げ回向を続けました。そんな、やっと自分のやるべき事に気づき、遺体安置所に毎日行っていた時のことです。

テレビも見られず新聞もない状況の中で、情報はラジオだけでした。

亡くなった方のお名前が毎日読み上げられている中で、あるパーソナリティーが言いました。「今、被災者の皆さ

んは茫然自失。何をして良いか判らなくて、立ちすくんでいる方が大勢おられると思います。被災者の私たちは、なるべく自分の仕事に戻りましょう。自分が本来やるべき仕事をしましょう。お店を営んでいた方は、一日でも早く店を開けましょう。サラリーマンの方は、会社へ行きましょう。貴方は貴方の本来の仕事が再開出来るように努力して下さい。」と呼びかけていたんです。私はハッとさせられました。

私がやるべき事は、炊き出しでも無く、大工仕事でも無く、僧侶としてやらねばならない事は、震災でお亡くなりになった方の供養なんだと、改めて気づかされたのです。

例えば、震災と関係ないパチンコ屋とかボーリング場とか娯楽施設でもそうです。何となくそんな遊技場は、こんな非常事態の時に、関係ないと思いますよね。でも本場にパチンコやボーリングを趣味にしている人は、それでストレスが軽くなるんですね。だから震災前に商いが成り立っていたなら、それは世間で需要があるから成り立っているわけで、無駄な職業なんて無いんですね。

この震災を通して、三つの無力感を感じました。

一つ目は、大自然に対する一人の人間としての素朴な無力感です。自然災害は、私たちの予想を遥かに超えてやってきます。その事実にも出来ない無力さ、人間としての非力さを痛感させられました。

また二つ目は、華やかな現代文明が目の前で崩れる無力感です。

現代人が建てた建築物や構造物があんなに、簡単に崩れるとは思ってもみなかった。電気やガス・水道などのライフラインは、すぐに復旧出来るものと勘違いしていました。

そして三つ目は救援ネットワークを持たない社会的な無力感です。しかしこの点は、阪神大震災を契機に変わってきました。日蓮宗の中でもネットワークが構築されてきています。柴田寛彦上人のビハラーも石原顕正上人の災害救

援のネットワークもそうです。この点は宗門全体の意識が変わってきていると思います。伝道部もいのちの井戸を始めめていますからね。

諸行無常―現実のあらゆる事物は絶えず変化し続ける

災害は突如としてやってきて、昨日まで暮らしに欠かせなかったものが、一瞬で不要な物扱いとなり「ガレキ」と呼ばれる。思い出の写真や自分の大切な宝物が震災の後にはガレキとなる。実際に不要なガレキなんて無いんです。諸行は無常と知っていたはずなのに、改めてかみしめました。

諸法無我―全てのものは因縁によって生じ実体性はない

祖師の立正安国論の冒頭をみれば、鎌倉の大地震は法華経という正法が弘まっていなかったからだと書かれている。若かった当初は「地震の原因と法華経を結びつけるなんてナンセンス。そんな考えには無理がある」と思っていました。しかしその後、色々と勉強していく中で、全ての物事は影響を及ぼし合う因果関係によって成り立っている。他と関係なしに独立して存在するものなどない、と理解出来てくるとそれが一念三千であり、諸法無我なんだと判ってきました。

涅槃寂静―仏になるために仏教が目指す「さとり」

私たちの悩みや苦しみは全て他人と比べるから起きるのですよね。「あの人の家族は無事だった」「あそこは倒壊を免れた」「何故私がいかに酷い目に遇うのか」人と比べることをやめて、「生老病死は当たり前だ」と受け入れなければならぬですね。全ての人がこの現実を素直に受け入れ、慌てず心静かに過ごす事を涅槃寂静と言うんですね。

お釈迦様はこの心のあり方を私たちに伝えたかったんですね。じゃあ僧侶の私は、このことを皆さんに伝えていかねばならないと、震災を体験したからこそ少しづつ判ってきたような気がするんです。

水道蛇口の話

突然ですが、皆さんの家の水道の蛇口ってどうなっています？レバー水栓って言って、レバーを上によれば水が出て、下に下げれば水は止まるタイプでしょうか？実は震災前は逆だったんですね。でも下に下げれば水が出る状態だと、物が倒れてレバーに当たると水が出っぱなしになるので、震災後に改良されたんですよ。

人間は智慧を持っているので、経験を次に活かす事が出来る。
進化することが出来ます。

「一億人総語り部」宣言

兵庫県立大学の防災教育研究センターの室崎益輝よしてるセンター長が「一億人総語り部」宣言というのを行いました。こうした体験をもっと語ろう。もっと体験に学ぼう。もっと裾野を広げようという意味です。この日本列島は災害が絶えません。いっどこで誰が遭遇するか判らない。不幸にも体験した人は、知らない人へ話す。それをまた誰かに伝える。一つ一つの積み重ねが、災害に強い人間を生み出して行きます。一人が十人に。十人が百人に。一億人は、そんな遠い未来の夢では無いと思います。

伝道教団として私たち教師は、伝えるという事を大切にしなければなりません。

震災も悲しみも。そしてお題目もです。

四條金吾殿御返事 建治二年「丙子」六月二十七日

苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思合て、南無妙法蓮華經とうち唱えへ居させ給へ。

これあに自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいたし給へ。

私は震災を体験して良かったと思つています。震災があつたからこそ、改めて僧侶の自覚、新発意の境地が心の底から芽生えました。色々な事に気づくためには苦しみも必要なんです。